

第103回くすり相談対応検討会 “患者の望む医薬品情報”

日本リウマチ友の会の長谷川会長がくすり相談対応検討会で講演

トピックス

患者中心の医療の実現に向けた環境変化の進展がめざましいなかで、医療消費者と直接の接点を持つくすり相談窓口が担う役割に対し、大きな期待が寄せられています。このような背景のもと、くすり相談対応検討会では10月23日に開催した「第103回くすり相談対応検討会」に(社)日本リウマチ友の会の長谷川三枝子会長を招聘し、「患者の望む医薬品情報」のテーマで講演していただきました。長谷川氏は、情報や知識の不足が患者の不安の大きな原因になっており、病気および治療や薬について理解、判断できる情報と知識を持つことが不安の解消につながると述べ、くすりに関する情報提供と相談の機能を持つ企業くすり相談窓口が、患者さんの不安解消に貢献していることを再認識する良い機会でした。

長谷川氏は、講演の中で、日本リウマチ友の会の概要、活動内容とともに、関節リウマチの患者からの相談について触れ、患者の療養の現状や不安、製薬企業や薬に対する要望などについて紹介しました。

1. 日本リウマチ友の会の概要について

リウマチに関する正しい知識を広め、リウマチ対策の確立と推進を図り、リウマチ疾患を有する者の福祉の向上に寄与することを目的に「日本リウマチ友の会」が設立され、全国に約20,000人の会員がいること、日本リウマチ学会、日本リウマチ財団などと連携を取り、患者の声を医療政策に反映させる活動を行っていることなど、友の会の概要を紹介しました。

患者の入会動機は、リウマチに関する情報を収集したい(約9割)、最新の医療情報や知っておくべき制度、会員の体験などが掲載されている機関紙『流』を読みたい(約6割)であり、長谷川氏は多くの患者が知識や情報を求めて入会すると述べました。再度、製薬企業の果たすべき役割について考えさせられるデータでした(図1)。

2. 友の会への療養相談から

友の会本部では患者から年間約7,000件の療養相談を受けており、「何科を受診すればよいのか」など専門の診療科・専門医を知らない、病気について理解が不足している、「免疫抑制剤、ステロイドなどは怖い薬だから・・・」など薬についての理解不足の患者が多い、その他、「生物学的製剤を使用している医療機関および医療費補助制度に関する情報を知りたい」、自助具等の日常生活に関すること、セカンドオピニ

オンに関すること、職場環境など仕事・就労に関すること、社会保障・社会福祉サービスに関することなどの相談があるとのことでした。



講演する長谷川氏

また、最近では「身体に良かれ」と思い健康食品を摂取している患者が多いが、医薬品と健康食品の区別や位置付けが十分に理解できていないばかりでなく、健康食品と相互作用を有する医薬品があることがわかってきており、薬物治療のなかで健康食品を摂取することについての新たな問題を提起しました。

3. 患者を対象としたアンケート調査から

患者を対象にした薬に関するアンケート調査の結果によると、薬は97.5%の人に処方されており、飲んでいる薬の名前・効能を知っている人は、「十分に知っている」、「大体知っている」を合わせると95.7%に及んでいると述べました。また、服薬状態も年々良好になってきているものの、指示どおり飲んでいない患者もおり、その理由で最も多いものは、副作用についての心配であり、「家族が怖い薬であると話した」とか「自分で調べてみたら怖い」など、情報が十分に入手できていないために飲むのをやめしてしまう例があることなどが報告されました。しかし、副作用を経験している患者が多いのも事実であり、その早期発見、対処のためにも情報は重要であると述べました。

患者が不安に思うことは、病気の悪化や進行、日常生活動作の低下および薬の副作用や合併症などであり、これは過去の調査から今まで変化がない、そして、患者会に入会することによりリウマチに関する正しい知識や情報が得られ、これらの不安が減少したということが調査結果としてあげられており、治療や薬について理解、判断できる知識と情報を持つことが不安の解消につながり、主治医とのより良い関係構築の上でも重要であること。また、いろいろな情報がきちんと患者へ提供され集約された状況下で治療を受けることが、患者にとって大切なことであることだと話しました。そして、くすり相談窓口に対して長谷川氏は、企業の立場から応えられることをきちんと伝え、次の良い治療につながる対応をして欲しいと述べました。私たちくすり相談窓口もその一端を担うことでくすりの適正使用のみならず、患者さんの不安が軽減できることを改めて確認しました(図2)。

また、最近開発された生物学的製剤では市販後の全例調査が行われており、より安全でより有効な使い方などの多くの治療データが集積されていますが、これらの情報が医療現場にフィードバックされ治療に活かされていることをもっと医療消費者に知ってもらうことが、患者の納得と協力を得るために必要であり、患者の不安解消につながる。また、患者は何かにつけて人手を頼むとき、激しい痛みがあり治らないときなどにつらいと思い、これらの「つらい思い」を軽減していくのが薬の役割だということを、長谷川氏は強調しました。リウマチの患者さんは、治療によって自立できることを強く望んでおり、くすり相談窓口においても、患者さんの立場に立った対応とともに、より有効で安全な薬物治療に関わる最新の情報を的確に提供していくことの重要性を改めて認識しました。

さらに長谷川氏は、患者の医療への要望は、「リウマチの原因究明と治療法の確立」、「安全で有効な薬の開発」とのことでしたが、以前は治らない病気であったリウマチが、最近では「寛解」という言葉が普通に



図1 会員でいる理由—知識や情報を求めて入会

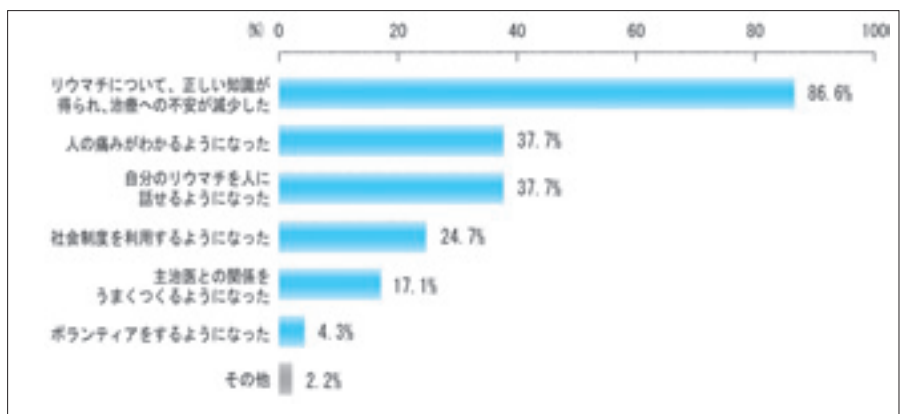


図2 入会後の変化

使える時代になってきたと述べ、さらに「治癒」という言葉が医師から普通に出てくる時代が近い将来来ると確信し始めていると、期待を込めて話しました。

4. 最後に

最後に、生物学製剤をはじめとした各種新薬で救われる患者が増えているものの、患者はさらに病因の解明が進み、より良い薬の開発、治療法の確立が進むことを切望していること、また企業くすり相談窓口については、より良い治療に結びつく「くすり相談」をこれからも行って欲しいと締めくくりました。

くすり相談対応検討会では、2008年2月のシンポジウムで、患者中心の医療実現への貢献を目指した今後の企業くすり相談のあり方について検討し、「くすり相談窓口は、医療消費者の知る権利を尊重し、自立を支援していくために、情報提供活動と相談対応に努める」などの決意表明を行いました。今回、長谷川氏の講演を聴き、情報提供と相談対応が患者さんの不安を軽減し、ひいては医療消費者の自立につながるとの認識を新たにすることができました。

(くすり相談対応検討会 佐藤 眞一)